戦後文学論

阿部正路

後文学論

阿部正路

桜楓社

阿部正路（あべ・まさみち）

昭和6年9月20日，秋田市に生まれた。秋田中学を経て，国学院大学大学院博士課程修了。現在，国学院大学教授。兼ねて東京女学館短期大学講師。主な著書に『終焉の文学』『疎外者の文学』『評伝日沼倫太郎』『折口信夫そして闇的存在』『日本の幽霊たち』『新・短歌への招待』『太陽の舟』，編著に『現代結社代表歌人選集』『和歌文学年表』，共編著に『現代短歌事典』『和歌の歴史』などがあり，他にいずれも共著であるが『民俗文学講座』『日本の説話』『和歌文学講座』『日本現代詩史』『日本文学の争点』『浪曼人・三島由紀夫』などがある。

検印
省略

昭和四十九年八月十日　初版印刷
昭和四十九年八月十五日　初版発行

定価一二〇〇円

著者　阿部正路
発行者　及川篤二
印刷所　共信社

東京都千代田区猿楽町二―八―一三
桜楓社
電話（〇三）二九一―五六六一
振替　東京　一八〇二一〇

戦後文学論・目次

君の肉眼の上の一噴きの涙は—序にかえて

I

戦後浪漫主義文学の原理　13

戦後二十年の文学的軌跡　28

戦後日本文学の〈神〉たち　43

戦後児童文学批判　57

II

戦後の文学

都会の中の孤島—坂口安吾・75頁／〈髪〉の記憶—織田作之助・79頁／『二十世紀旗手』断片—太宰治・83頁／〈眼〉を食う蟻—高見順・88頁／ひかりごけ—武田泰淳・93頁／ゆれる葦—網野菊・99頁／紫苑物語—

石川淳・104頁／なまみこ物語—円地文子・108頁／姨捨—井上靖・112頁／黒い雨—井伏鱒二・116頁／死の彷徨—新田次郎・121頁／《刻》の中へ—北杜夫・125頁／戦中派不戦日記—山田風太郎・129頁／自走火船—杉浦明平・134頁／鰊漁場の図—曽野綾子・139頁／明晰という闇—丸谷才一・143頁／鷲になった少年—倉橋由美子・149頁／ネズミの恐怖—開高健・153頁

Ⅲ

鏡の中の花—川端康成の死と生　161
眼と魂の間—大岡昇平の神と人　179
常識の犯罪—石川達三の思想と判断　186
修羅を見るもの—野坂昭如の虚と実　201
時の超克—深沢七郎の過去と未来　214

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

君の肉眼の上の一噴きの涙は

序にかえて

日本の敗戦は、私に、既存のほとんどすべてが、まったく無価値なものであって、見えるものは幻であり、見えないものにこそ真実が存在しているはずだという、ぬきがたい観念をたたきこんだ。

——逐に敗けたのだ。戦いに破れたのだ。夏の太陽がカッカと燃えている。眼に痛い光線。烈日の下に敗戦を知らされた。蟬がしきりに鳴いている。音はそれだけだ。静かだ。

ビルマはどうなるのだろう。ビルマには是非独立が許されてほしい。私はビルマを愛する。

ビルマ人を愛する。

日本がどのような姿になろうと、東洋は解放されねばならぬ。人類のために、東洋は解放されねばならぬ。

日陰の東洋……哀れな東洋……

東洋人もまた西洋人と同じく人類なのだ。
人類でなくてはならないのだ。

高見順の、『敗戦日記』（昭三四・四、文芸春秋新社）の、「八月十五日」の一節である。永井荷風の『断腸亭日乗』の

今日正午ラジオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る。休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ

でとどまる「八月十五日」の日記とは、まさに対称的な極北を示すものだといえるだろう。この日の『断腸亭日乗』は、その欄外に「正午戦争停止」と、まるで、吐き捨てるようにして墨書してある。それはしかしながら、確実に動かぬものとして、確固として存在しつづけている。

高見順と永井荷風の同じ日の日記は、日本の敗戦を受けとった文学者のありようの、実にさまざまであったことをも典型的にさし示している。のみならず、当時の日本人たちの、日本の敗戦の受けとめかたをもまた、さまざまに暗示する。

日本の敗戦を受けとった日本人の反応のしかたは、大きくわけて三つあったということができよ

う。そのことについては、拙書『終焉の文学』（昭三五・五、五月書房）で既に明らかにして置いたので、ここでは詳述しないが、第一のパターンは、日本の敗戦を、今か今かと待ち受けていた一群の、いわば〈戦時中を獄中とした〉人びとであり、第二は、日本の敗戦によって、すべてが崩壊したと感じてあらゆる価値観の変化になすところのなく迷った人びとであり、第三には、なお神州不滅を信じていた人びとである。

そうした三つのパターンに微妙にかかわった、いわゆる〈焼跡闇市派〉や、更には〈無傷の青春〉を軽やかに誇る一群の若ものたちの登場によって、日本の戦後は、大きく展開してゆくのである。

さて、戦後の文学は、まずもって、谷崎潤一郎の『細雪』（昭二一・六～昭二三・一二、中央公論社）の刊行や『荷風全集』全二十四巻の完結（昭二八・四、岩波書店）といった型で豊かに示されてゆくのだが、それらは主として、戦前に既に型をなしていたものであって、戦後における戦後文学らしい出発は、宮本百合子の『歌声よ、おこれ』（「新日本文学」創刊準備号、昭二一・一）に示されたと見てよい。いわば、さきに述べた、第一のパターンから戦後文学の出発が始まり、示されてゆくのである。

私たちは、今度の戦争において、わずか十六七才の若者が、どんなにして死んでいったかを知っている。どれだけの父親、兄、夫が死んだかそれを知っている。さらに尨大な人々の数が、それらの人々がいかにして死に、自分たちは、どうその間を生きてきたかという事実を知っている。生き

てとどまったそれらの人々と、その人々を迎えている今日の日本のこころのうちに、いおうとするたった一つの感想もないと誰が信じよう。

今も、私の心に残る、宮本百合子の『歌声よ、おこれ』におけるもっとも感動的な一節である。宮本百合子の立論には、出発点から革命党の文化政策の匂いが強かった。しかし、右の一節には、宮本百合子の正しい戦後認識が、そのみずみずしい、きわめて抒情的な論題と重なりあっている。そこに、その立論の新鮮さを汲みとることができるのだ。

戦後における、もっとも戦後文学らしい作品を発表したものの一人に、野間宏がいる。『真空地帯』(昭二七・二、河出書房)にしても『わが塔はそこに立つ』(昭三七・九、講談社)にしてもすぐれて散文的・即物的であって、抒情の世界は遠い。そこには、ブリューゲルの画集をつよく意識に置いた『暗い絵』(昭二二・一〇、真善美社)の持つ、あの、どろどろした源液的な世界がみちみちている。それが、いかにも、戦後における戦後文学の創造者たる野間宏をきわだたせている。けれども、野間宏の本質は、はたしてそれだけにとどまるものなのであろうか。

ああ、涙のための戦ひに
君の魂は芽ぶいて来る

ひとみなの苦しみに霞むこの景色の中に
数知れぬ涙を附けた魂を呼んで。

これは、野間宏の詩集『星座の痛み』（昭二四・三、河出書房）に収められた「君の肉眼の上の一噴きの涙は」の一節である。詩を鑑賞する上で、全体の部分にすぎない一節のみをぬき出すことは誤りであるけれども、その誤りを侵した上でもなおかつこの詩は、みずみずしい。単にみずみずしいばかりではなく、痛々しくみずみずしい。

この詩は「ひとよ、世の苦しみにむごく撃たれた心にもやはり残つてゐる、君の固く閉した心の深い柔かい処を開いて、風に吹かせよ！」と詩い起して「新しい季節を洗ふ優しい風が／多くの心の入口で苦悩を吹き分けてゐる、／そして人々の魂だけの涙を降らし去り行く春の景色の中で／君の魂の芽生の上を通りすぎる」と詩い了えている。詩が終っても、なお、噴き出る涙はとどまらず、魂の芽生えは、更に一層深く力強く始まっている。

野間宏は、確かに、戦後における、きわめて秀れた戦後的な作家であった。しかし、作家としての野間宏の、もっとも深い部分に、この「君の肉眼の上の一噴きの涙は」という詩が示すような、きわめて、詩的な、しかも抒情的な世界が生きつづけていたのではないか。それをもっとも深いところで大切にしていた作家が野間宏なのだといえるだろう。

この詩の、もっとも重要なテーマは「魂の不可思議な重みを支へてゐる」ところにあるのであって、即物的な詩であるよりも、より多く唯心的なのであり、そこにこそ、野間宏の詩の魅力が存在しているということができるだろう。そしてそれは、死んで、過去になった魂ではなく、これから「芽ぶいて来る」魂を詩いあげていることにおいて、一層魅力的なのである。

野間宏の詩集『星座の痛み』は、さまざまの要素を持ちつつも、要するに「再生する魂」の詩集なのだということができる。要するに《魂の詩集》なのだ。そうして、こうした魂の確認においてこそ、戦後文学におけるもっとも大事な一出発点が示されているというべきであると考える。

つまり、戦後における戦後文学の出発の様相は、日本の敗戦を受けとった三つのパターンとして、図式的かつ段階的に見きわめてゆくのみならず、更にその根柢にあるところの、たとえば「君の肉眼の上の一噴きの涙は」という詩の一節に、美しく刻みこまれている〈魂の所在〉とそのありようを注意深く見つめつづけてゆくべきなのではあるまいか。

更に、戦後文学とは、戦時中のおびただしい犠牲死ののちにあって、真の蘇生の意味を問いつづけることではなかったのか。

戦後とは、とりもなおさず、数多くの犠牲死によって救われ、あるいはそれを利用した人びとによって展開された虔妄の歴史であろう。だから、からくも生き残ったものたちは、ひたすら死者たちを

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

封じこめ、生者尊重の論理のみをふりかざした。だが、死者たちは死なない。死は永遠の持続であり、生は変貌してやまないところの、移りゆくものにすぎず、生者は、むしろ死者の影にすぎないからだ。まことに、死者の復活こそ、戦後文学史の真の復活を意味するものでなければならないはずのものであった。

死者たちの立ちかえりを、私は、別に書き下して発表した『日本の幽霊たち』（昭四七・九、日貿出版社）の、単なる立ちかえりの問題として概括しようとしているのではない。たとえば岩崎武夫氏の『さんせう太夫考』（昭四四・九・二、平凡社）に示されているような、さんせう太夫の支配の網の目を逃れたずし王が、摂津の国の天王寺にたどりつき、そこで賤しい乞丐人（こつがいにん）の身分を捨てて、生命の浄化（きよまり）と更新を得て、もとの奥州五十四郡の主として復活することをも含めて考えたいのだ。岩崎氏は、そこで演じられた生命の転換と更新の劇を「説経における場の構造と論理」とよんでいるが、そうした〈場〉の再発見もまた、戦後において確認されたものとして重く評価すべきであり、「天王寺の世界が、日常的な経験世界とは異なる、特殊な空間構造をもった奇蹟の生ずる場所」としていることに注目すべきである。日本においては、蘇生論は、過去、現在、未来にわたる、いわば、時間の問題としてのみかかわるのでなく、地理的な同時存在としての空間認識の問題としてもかかわっていることを意味する。〈わが蘇生論〉は、このように、時間的かつ空間的な二重構造の上でとらえられてゆかなければなるまい。

戦後の文学において、とりわけ心に残るのは、木下順二氏の「百姓女たよ」である。このラジオ東京の「物語女性史」のシリーズのために書かれた、あはれな物語は、たよという百姓女が、嫁入り先の労働のつらさと、そのつらさをうわまわる、いびられるつらさにたえかねて、縁切寺である鎌倉松が岡の東慶寺にかけこみ、三年後にやっと離婚することができて実家に帰るのだが、結局は家の者から邪魔者あつかいをされて後妻にやられ、そこで一層つらい目にあいながらついに救いはこず死んでしまうという物語である。何とも救いようのない暗い物語であり、縁切寺たる東慶寺は「おらたち男にとってはなんとも気にくはねえ不都合千万な寺」なのだが、百姓女、たよにとっても、結局は何の救いをもたらさない寺であった。

蘇生を約束しながら何の蘇生をももたらさぬ〈場〉としてこの場合の東慶寺はある。むしろ、蘇生の意味は、中世の説経の世界である天王寺によって生かされ、蘇生をよびかけながら、その理想は、「百姓女たよ」においては、東慶寺を経過しつつも、なお〈死〉によって閉ざされる。ここには、戦後文学の、くやしい現実が示されている。

蘇生を、木下氏は認めないわけではない。氏の代表作たる『夕顔』も、木下氏なりの蘇生論の具体化というべきであろう。それは、佐渡の昔話によること、既に著者自身によって明らかにされているところだが、〈鶴の恩返し〉の理想は、なお、多くの姿をもっている。例えば、佐渡が隣接している新潟の風土誌であり、民俗誌であり、秀れた科学書でもある『北越雪譜』の最後を美しくしめくくっ

ている「鶴恩に報ゆ」においては、二羽の鶴が、稲二茎を落すという話をとどめている。その穂の一枝には、米が四、五百粒もあったという。「さては去年の病鶴恩に報んためにに異国より咥えきたりしならん」と『北越雪譜』は記しているが、これは『出雲国風土記』が伝える稲穂落下伝説につながるものであって、『夕鶴』の背景の格別に深いことを立証しているのである。

グラスゴーのセント・アルドルース大学出身の詩人で評論家のG・S・フレイザーは『夕鶴』について「これは単に、幻想的な物語りというに止まらない。内に深い意味のこもっている物語」（「深いペイソスの表現」）であると述べている。作者である木下氏は「大切なことは、救われた鶴が報恩のために嫁に来てのぞき見されて去って行くというこの話を、既に僕たちが知っていたということこそ重視すべきである」と述べている。「尤もそれを、いつ、どこで、誰から教わったかということになると、お互にあまり確かではないかもしれない。けれども僕はこの話しを知っていた」（「作品について」）と述べている。この、いわば、心意伝承の世界こそ、『夕鶴』を理解する上で、もっとも大事なことだというべきであろう。

〈わが蘇生論〉の意図するところは、誰から教わったわけでもないが、それを忘れ得ないものとして知っているという事実こそ大切にすべきであるという点にあるのであって、目に見えぬ民族の意志を視覚化し、具体化したいということにほかならない。

君の肉眼の上の一噴きの涙は、時として視野を曇らすかも知れぬ。しかしながら君の肉眼の上の一

噴きの涙は、ふだん見えているものが実は幻であり、ふだん見えないものにこそ真実が含まれていることを示すだろう。それはあくまでも肉眼でとらえるものでなければならず、それはあくまでも長い伝統を底に持つ真実に立脚したものでなければならない。そしてそれは常に〈やさしさ〉でみたされているものでなければならない。私の意図する〈戦後文学論〉は、一つの時代に限定されがちな現象的な政治的な思想を超えた世界につながるものでなければならない。そうした、いわば〈新しい民俗文学〉としかいいようのない広く深い一領域に確固として立つものでなければならない。

戦後浪漫主義文学の原理
戦後二十年の文学的軌跡
戦後日本文学の〈神〉たち
戦後児童文学批判

戦後文学論・I

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c